〔D 年〕降誕節第１主日(2023 年 12 月 31 日)

【旧約聖書日課】イザヤ書　11章1～10節

1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
2 その上に主の霊がとどまる。
知恵と識別の霊
思慮と勇気の霊
主を知り、畏れ敬う霊。
3 彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず
耳にするところによって弁護することはない。
4 弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち
唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
5 正義をその腰の帯とし
真実をその身に帯びる。
6 狼は小羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。
子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。
7 牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。
9 わたしの聖なる山においては
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように
大地は主を知る知識で満たされる。
10 その日が来れば
エッサイの根は
すべての民の旗印として立てられ
国々はそれを求めて集う。
そのとどまるところは栄光に輝く。

【使徒書日課】

ガラテヤの信徒への手紙　3章26節～４章7節

３ 26あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。27洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。28そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。29あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

４ 1つまり、こういうことです。相続人は、未成年である間は、全財産の所有者であっても僕と何ら変わるところがなく、2父親が定めた期日までは後見人や管理人の監督の下にいます。3同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。4しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。5それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。6あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。7ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

【福音書日課】マタイによる福音書　2章1～12節

1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。
6 『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」
7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

イザヤ書11章1～10節

1 エッサイの株から一つの芽が萌えいで
その根から若枝が育ち
2 その上に主の霊がとどまる。
知恵と分別の霊
思慮と勇気の霊
主を知り、畏れる霊。
3 彼は主を畏れることを喜ぶ。
その目に見えるところによって裁かず
その耳の聞くところによって判決を下さない。
4 弱い者たちを正義によって裁き
地の苦しむ者たちのために公平な判決を下す。
その口の杖によって地を打ち
その唇の息によって悪人を殺す。
5 正義はその腰の帯となり
真実はその身の帯となる。
6 狼は小羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。
子牛と若獅子は共に草を食み
小さい子どもがそれを導く。
7 雌牛と熊は草を食み
その子らは共に伏す。
獅子も牛のようにわらを食べる。
8 乳飲み子はコブラの穴に戯れ
乳離れした子は毒蛇の巣に手を伸ばす。
9 私の聖なる山のどこにおいても
害を加え、滅ぼすものは何もない。
水が海を覆うように
主を知ることが地を満たすからである。
10 その日になると
エッサイの根がもろもろの民の旗印として立つ。
国々は彼を求め
彼のとどまるところは栄光に輝く。

ガラテヤの信徒への手紙3章26節～4章7節

３[26]あなたがたは皆、真実によって、キリスト・イエスにあって神の子なのです。[27]キリストにあずかる洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを着たのです。[28]ユダヤ人もギリシア人もありません。奴隷も自由人もありません。男と女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。[29]あなたがたがキリストのものであるなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

４[1]つまり、こういうことです。相続人が未成年であるうちは、全財産の所有者であっても奴隷と何ら違いはなく、[2]父親の定めた時期まで後見人や管理人の下にいます。[3]同様に、私たちも未成年であったときには、この世のもろもろの霊力に奴隷として仕えていました。[4]しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から生まれた者、律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。[5]それは、律法の下にある者を贖い出し、私たちに子としての身分を授けるためでした。[6]あなたがたが子であるゆえに、神は「アッバ、父よ」と呼び求める御子の霊を、私たちの心に送ってくださったのです。[7]ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人でもあるのです。

マタイによる福音書2章1～12節

[1]イエスがヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、[2]言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」[3]これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。[4]王は祭司長たちや民の律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。[5]彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

[6]『ユダの地、ベツレヘムよ、
あなたはユダの指導者たちの中で
決して最も小さな者ではない。
あなたから一人の指導者が現れ、
私の民イスラエルの牧者となるからである。』」

[7]そこで、ヘロデは博士たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。[8]そして、こう言ってベツレヘムへ送り出した。「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。私も行って拝むから。」[9]彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子がいる場所の上に止まった。[10]博士たちはその星を見て喜びに溢れた。[11]家に入ってみると、幼子が母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。[12]それから、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分の国へ帰って行った。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・12 月 31 日「降誕節第 1 主日」の日課主題は「東方の学者たち」。主流教派で採用されている「改訂共通聖書日課」では、「降誕日」後の主日は「聖家族の祝日」とされ、「東方の学者たち」の主題は伝道に基づいて「公現日」（または「公現の主日」）に設定されている。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、いわゆる「メシア預言」の一つとして数えられる預言の箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、洗礼を受けた者の「神の子」としての自己理解を説く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「東方の学者の来訪」を物語る箇所。

旧約日課（イザヤ 11 章より）

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）「後の預言者」だの第一に置かれた預言文書。書名となっている「預言者イザヤ」は、前 8 世紀後半に南王国ユダで四代の王に仕えた宮廷預言者であるが、本預言書中でこの歴史的預言者に帰されるのは 1～39 章と考えられ、40 章以降は前 6 世紀のバビロン捕囚後の時代に「預言者イザヤの伝統継承を自認する祭司預言者集団」によって著された預言集（「第二イザヤ」と呼ばれる）とされる。日課箇所は、前 8 世紀の「預言者イザヤ」に帰される預言。

・「預言者イザヤ」が宮廷預言者として仕えた王の名は、本書標題（1:1）で 4 名挙げられているが、その内の最初の二人（ウジヤ王、ヨタム王）と預言者との関係は、本預言書からはほとんどわからない。他方で、あとの二人（アハズ王、ヒゼキヤ王）については、王と預言者が直接関わった逸話が預言書中に組み組まれており、これを手掛かりにすると、本預言書 1～39 章は概ね、時代背景に即した預言句が順に構成されていると推認される。日課箇所は、7 章でアハズ王と預言者イザヤが北王国の要求を巡って議論したことを伝えた後に続く一連の預言句の一つで、7:14 の「インマヌエル預言」に対応する新王誕生（アハズ王の後継王＝ヒゼキヤ王の即位）に関連する預言である。アハズ王は、アラム王国と同盟を組む北王国から同盟への参画または王の交代（つまりダビデ王朝の断絶！）を要求されていたが、二大国のアッシリアまたはエジプトに頼ることを考えていた。それに対して、イザヤは、「ナタン預言」（サム下 7 章）に基づいて、ダビデ王朝が存続するという「インマヌエル預言」を告げ、実際に次王ヒゼキヤの即位を見ることになった。日課箇所は、おそらく、ヒゼキヤ王の即位式などで国家祭儀として告げた祝詞を記録したものであろう。

・日課箇所の最初と最後にある「エッサイ」は、ユダ王国の祖王ダビデの父親の名で、「サムエル記」上 16 章以下に繰り返し現れるが、正典「後の預言者」中ではこの箇所でしか見られない。

使徒書日課（ガラテヤ 3 章）

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第四に置かれた書簡文書。パウロが同行したバルナバ宣教団によって創設されたガラテヤ地方の諸教会に宛てて著した書簡で、エルサレムの教会共同体から来た者らが異邦人キリスト者に対しても「割礼」受けて「ユダヤ人らしく」なることを勧めていたことを問題視し、代わりとなる自身の福音理解を展開している。

・パウロの福音理解における前提は、人の救いは「神の民の共同体」に入れられることによる、という救済理解である。当時の主流のユダヤ教社会では「ユダヤ人」＝「救いの共同体」とみなされており、異邦人がその共同体に加入するためには、「割礼」および「律法に規定された生活規範の遵守」によって「ユダヤ人らしく」なることが求められていた。パウロも、元来はそのような理解をしていたが、キリスト者を迫害する中で主イエスの新しい共同体理解に導かれ、「キリストに結ばれた者の共同体」としての「教会（エクレシア）」こそが「新しい神の民の共同体」であるという福音理解に至った。主イエスは、ユダヤ人として生まれながら「ユダヤ人共同体」から疎外されていた「罪人、徴税人」らを「アブラハムの子」として共同体に回復する実践をされたが、パウロはこの実践を、「異邦人」にまで拡大して「神の民の共同体」に加入させる福音として理解した。その際、パウロが「共同体」加入の条件として示したのが、日課箇所でも取り上げられている「洗礼」であり、「割礼」や「律法の規定に基づく生活習慣の遵守」は単に「ユダヤ人社会」への加入をしるしづけるに過ぎないものとみなして、「救いとは無関係」と強調した。

・日課箇所では、「洗礼」を「キリストに結ばれること」として定義しているが、この理解はローマ 6 章でも同様に示されている。初期教会における「洗礼」理解は、必ずしも一つに定まっておらず、おそらく主流の使徒たちは、洗礼者ヨハネの洗礼に準じた「悔い改め」として、また「イエス・キリストへの弟子入り」として、「洗礼」を位置づけていたと考えられる。もっとも、主イエスが弟子たちに洗礼を授けていた事実は伝えられておらず（実際になかったのか、なかったことにしたのか、わからないが）、主イエス死後の教会では、「主イエスの受洗の逸話」に基づいて、「イエスの名による洗礼」が聖霊授与を伴って霊的な弟子入り、すなわち「神の子」としての生き方の継承を意味するようになったと考えられる。パウロは、さらに共同体的な意義をこれに見出し、「洗礼」によって受洗者とキリストが同じ聖霊によって霊的に結び合わされ、一つの「体」を形成するようになるという、「キリストの体＝教会」論を展開するようになったのだろう（Ｉコリ 12 章など）。

・26 節「キリスト・イエスに結ばれて」の直訳は「キリスト・イエスの内で（エン・クリストォ・イエースゥ）」。27 節「洗礼を受けてキリストに結ばれた」の直訳は「キリストへと（エイス・クリストン）洗礼された」。いずれも、キリストへの帰属を示唆する表現。

福音書日課（マタイ１章より）

・日課箇所は、降誕物語中、東方から占星術の学者らが来訪し幼子を礼拝する逸話の箇所。続く箇所（13節以下）と合わせて一つの逸話物語を構成しており、旧約「出エジプト記」の伝える「モーセの誕生物語」との類比性が指摘される。

・「占星術の学者」と訳されるギリシア語「マゴス」は、古代ペルシア語の「マグス」から来ており、ペルシア系祭司階級の呼称としてメディア王国で用いられていたことが知られている。ラテン語では「マギ」。

・6 節は「ミカ書」5:1 の引用であるが、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）の当該箇所とは一部で意味が逆転している。すなわち、ユダヤ正典では「お前はユダの氏族の中でいと小さき者」であるが、マタイの引用では「お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない」となっている。これは、一般に用いられてきたギリシア語訳旧約聖書（七十人訳）とも一致せず、マタイの引用元は不明。マタイは、主イエスのダビデに繋がる家系を強調しており、ユダ王国＝ダビデ王家至上主義に基づく改変かもしれない。

来週の誕生日 （12 月 31 日～１月６日）

主日礼拝の讃美歌から

・21-248 **番「エッサイの根より」**は、ドイツ・ライン地方に伝わるアドヴェント・キャロルで、1599 年出版のカトリック聖歌集で聖母マリアを讃える歌として収録されたのが初出。その後、17 世紀になって、プロテスタントの作曲家 M.プレトリウスが強調点をマリアから幼子イエスに置き換えて改変し、19 世紀以降プロテスタント諸教派で広く歌われるようになった。

・21-278 **番「暗き闇に星光り」**（Ｉ118**「くしき星よ、やみの夜に」**）は、19 世紀イギリスで作られた公現日のための讃美歌。作詞者R・ヒーバーは、「聖なる、聖なる」（21－351）の作者。初行の「星 stars」は、原曲では「息子ら sons」。

・21-276 **番「あかつきの空の美しい星よ」**（＝Ｉ346 **「たえにうるわしや」**）は、宗教改革後の 16 世紀後半ドイツでルター派牧師として活動したフィリップ・ニコライの代表作で、「コラールの女王」とも呼ばれる讃美歌詞。ニコライは、欧州中をペストが襲い、連日 30 件もの葬儀を執り行うという経験をし、ペストが終息した後にこの詞を作したとされる。この詞には、「天の花婿イエス・キリストについての信仰深い魂の霊的婚礼歌。預言者ダビデの詩編 45 編に基づく」という副題が付けられており、当初は結婚式に用いられたが、後に公現日の讃美歌として定着した。曲は、ストラスブール詩編歌収録の曲を参考にニコライが作ったと考えられている。

・21-180 **番「去らせたまえ」**は、「シメオンの賛歌（ヌンク・ディミッティス）」を歌う賛歌。スイスの宗教改革者J・カルヴァンの教会で音楽を担当したブルジョワが作曲し、カルヴァン編纂の「ジュネーブ詩編歌集」に収められてきた。

21-248「エッサイの根より」

Es ist ein Ros entsprungen

1. Es ist ein' Ros' entsprungen, / aus einer Wurzel zart. / Wie uns die Alten sungen, / von Jesse war die Art. / Und hat ein Blüm'lein 'bracht; / mitten im kalten Winter, / wohl zu der halben Nacht.
2. Das Röslein, das ich meine, / davon Jesaia sagt: / hat uns gebracht alleine / Marie die reine Magd. / Aus Gottes ew'gem Rat, / Hat sie ein Kind geboren, / Und blieb ein reine Magd. / or: Welches uns selig macht.
3. Das Blümelein, so kleine, / das duftet uns so süß; / mit seinem hellen Scheine / vertreibt's die Finsternis. / Wahr'r Mensch und wahrer Gott! / Hilft uns aus allem Leide, / rettet von Sünd' und Tod.

21-278「暗き闇に星光り」

Brightest and best of the stars of the morning

1. Brightest and best of the *sons* of the morning; / Dawn on our darkness and lend us thine aid; / Star of the East, the horizon adorning, / Guide where our infant Redeemer is laid.
2. Cold on His cradle the dewdrops are shining; / Low lies His head with the beasts of the stall; / Angels adore Him in slumber reclining, / Maker and Monarch and Savior of all!
3. Say, shall we yield Him, in costly devotion, / Odors of Edom and offerings divine? / Gems of the mountain and pearls of the ocean, / Myrrh from the forest, or gold from the mine?
4. Vainly we offer each ample oblation, / Vainly with gifts would His favor secure; / Richer by far is the heart's adoration, / Dearer to God are the prayers of the poor.

21-276「あかつきの空の美しい星よ」

Wie schön leuchtet der Morgenstern

1. Wie schön leuchtet der Morgenstern / Voll Gnad' und Wahrheit von dem Herrn, / Die süße Wurzel Jesse! / Du Sohn David zus Jakobs Stamm, / Mein König und mein Bräutigam, / Hast mir mein Herz besessen, / Lieblich, freundli, / Schön und herrlich, groß und ehrlich, / Reich von Gaben, / Hoch und sehr prächtig erhaben!
2. Ei meine Perl', du werte Kron', / Wahr'r Gottes- und Mariensohn, / Ein hochgeborner König! / Mein Herz heißt dich ein Lilium, / Dein süßes Evangelium / Ist lauter Milch und Honig. / Ei mein Blümlein, / Hosianna, himmlisch Manna, / Das wir essen, / Deiner kann ich nicht vergessen!
3. Geuss sehr tief in mein Herz hinein, / Du heller Jaspis und Rubin, / Die Flamme deiner Liebe / Und erfreu' mich, daß ich doch bleib' / An deinem auserwählten Leib / Ein' lebendige Rippe! / Nach dir ist mir, / Gratiosa coeli rosa, / Krank und glimmet / Mein Herz, durch Liebe verwundet.
4. Von Gott kommt mir ein Freudenschein, / Wenn du mit deinen Äugelein / Mich freundlich tust anblicken. / O Herr Jesu, mein trautes Gut, / Dein Wort, dein Geist, dein Leib und Blut / Mich innerlich erquicken! / Nimm mich freundlich / In dein' Arme, daß ich warme / Werd' von Gnaden! / Auf dein Wort komm' ich geladen.
5. Herr Gott Vater, mein starker Held, / Du hast mich ewig vor der Welt / In deinem Sohn geliebet. / Dein Sohn hat mich ihm selbst vertraut, / Er ist mein Schatz, ich bin sein' Braut, / Sehr hoch in ihm erfreuet. / Eia, eia, / Himmlisch Leben wird er geben / Mir dort oben! / Ewig soll mein Herz ihn loben.
6. Zwingt die Saiten in Zithara / Und laßt die süße Musika / Ganz freudenreich erschallen, / Daß ich möge mit Jesulein, / Dem wunderschönen Bräut'gam mein, / In steter Liebe wallen! / Singet, springet, / Jubilieret, triumphieret, / Dankt dem Herren! / Groß ist der König der Ehren!
7. Wie bin ich doch so herzlich froh, / Daß mein Schatz ist das A und O. / Der Anfang und das Ende! / Er wird mich doch zu seinem Preis / Aufnehmen in das Paradeis, / Des klopf' ich in die Hände. / Amen! Amen! / Komm, du schöne Freudenkrone, / Bleib nicht lange, / Deiner wart' ich mit Verlangen!